

「立華時勢粧」は貞享5年（元禄元年・1688年）に世に出た富春軒仙溪による8冊の花伝書で、その内容は次のようになっている。

卷一「立花時勢粧上」（33図）

立花時勢粧序

真行草の図

- 真の花形（一図）
- 行の花形（一図）
- 草の花形（一図）

- 直心立の内真の花形（二図）
- 直心立の内行の花形（二図）
- 直心立の内草の花形（二図）

除心真行草の事

- 除心立の内真の花形（一図）
- 除心の内行の花形 請上り立（一図）
- 同 水際除 請上り立（一図）
- 同 流枝持立（二図）
- 同 内副立（二図）
- 同 請流枝立（二図）
- 同 中流枝立（二図）
- 同 左流枝（二図）
- 除真の内草の花形（十一図）

砂物真行草の事

- 砂の物の内真の花形（一図）
- 同 行の花形（一図）
- 同 草の花形（一図）

卷二「立花時勢粧中」（45図）

雑体の図（四十五図）

卷三「立花時勢粧下」（40図）

秘曲の図

- 真の対の花（二図）
- 行の対の花（二図）
- 草の対の花（二図）
- 合真（一図）
- 二つ真（一図）
- おもと前置（一図）
- 小しだ前置（一図）
- 松の前置（一図）
- 竹の胴（一図）
- 南天の胴（一図）
- 藤の心（一図）
- 見越竹（一図）
- 牡丹の心（一図）
- 草花（一図）
- 松竹梅（一図）
- 杜若一色（三図）
- 荷葉（蓮）一色（三図）
- 菊の一色（三図）
- 水仙一色（三図）
- 松の一色（三図）
- 紅葉一色（三図）
- 櫻の一色（三図）
- 草花砂の物草（一図）

卷四「立花秘伝抄 一」

常磐木の部

- 木 枝 気條 株 葉
- 花 蔓 松 若松 笠松
- 緑松 引松 松笠 禿松
- かこい松 根じめ松
- 檜 柏 秋柏 枇杷 栢樹
- 梅 神 かなめ わくら
- しらかし かすおしみ 黄楊
- 棕櫚 杉 うすの木 夏ばせ
- ふしくる 栗の若ばえ
- 檜の葉 まゆみ 猿すべり
- 柞 晒木 苔 柳 河楊
- 紅葉

卷五「立花秘伝抄 二」

花の部

- 櫻 梅 桃 海棠 梨の花
- 辛夷木 杏の花 百日紅
- 蘇枋花 木蓮花 椿 山茶花
- 石楠花 長春 躑躅 姥つつじ
- 蓮花つつじ 餅つつじ
- 五月つつじ かうぼけ 榎櫨
- 馬酔木花 紫陽花 くちなし
- 桐の花

実の部

- 沢水木 水木 梅もどき
- 七かまど たらよう
- 仙蓼 みむらさき つる水木
- 深山密 たちばな 燈籠草
- えびついばら 南天 藜蘆

通用物の部

- 竹 仙人杖 鬼鍼 鞭竹
- 唐笹 くまざさ 笹
- 牡丹 藤の花 南天
- 小しだ 萩 山吹 庭桜
- 粉団花 小手まり 米柳
- 小米花 黄梅 連翹 種紫
- つる水木 えびついばら
- 仙蓼 下野 きじの尾 葱
- 矢筈 磐梨 がんそく 白丁花
- 岩檜葉 ひとつ葉 荔枝 薔薇

卷六「立花秘伝抄 三」

草の部

- 金錢花 露花 著我 高麗菊
- 鴨脚花 あやめ 美人草 芥子花
- うつば草 春菊 銀宝珠
- 杜若 きすげ 姫萱草 石竹
- 薊 花菖蒲 芍薬 早百合草
- 姫百合草 洗百合草
- あたご百合草 さかりゆり
- 為朝百合草 鹿子百合草
- 草 蒲 つくも
- 蓮 河骨 紫苑 萱草 葵
- 桔梗 女郎花 雁緋
- 松本仙翁花 仙翁花 檜扇
- 薄唐黍 鶏頭花 旋覆花
- 黄精 蒲公英 紅花
- だんだく花 菊 寒菊

われもこう かるかや 栗

- 駒つなぎ 沢ききょう
- 犬子草 浜木綿 蘭
- 藤ばかり 鼠尾草 龍膽
- よるいとおし 唐車前 あわ雪
- 花づる 七重草 葱草
- きんき草 矢筈 秋海棠
- いさざ 野かいどう けまん
- 茜草 莎草 桜草 虎尾
- つち草 金宝花 にし木々
- うつほ草 仙茨菰 ばれん
- 仏生花 岩芭蕉 水仙花

卷七「立花秘伝抄 四」

七つ枝の事（図）

- （立花道具の図）
- 対の花真行草の事
- 松竹梅三瓶の事
- 立花陰陽の事
- 十三ヶ條法度の事（図）
- 古代十ヶ條法度の事
- 立花八戒
- 立花十徳
- 立花十体
- 祝言に嫌うべき事
- 立花細工の事（図）
- 草木水あくる事
- 花瓶の事（図）
- 込の事（図）
- 床前の事
- 下指の事
- 立花見様の事
- 立花習いようの事

卷八「立花秘伝抄 五」

九品の花形立様の事

- 極真立
- 除心真の花形立様の事
- 除心行の花形立様の事
- 除心草の花形立様の事
- 草の花形立様の事
- 砂の物真行草
- 地取の事（図）

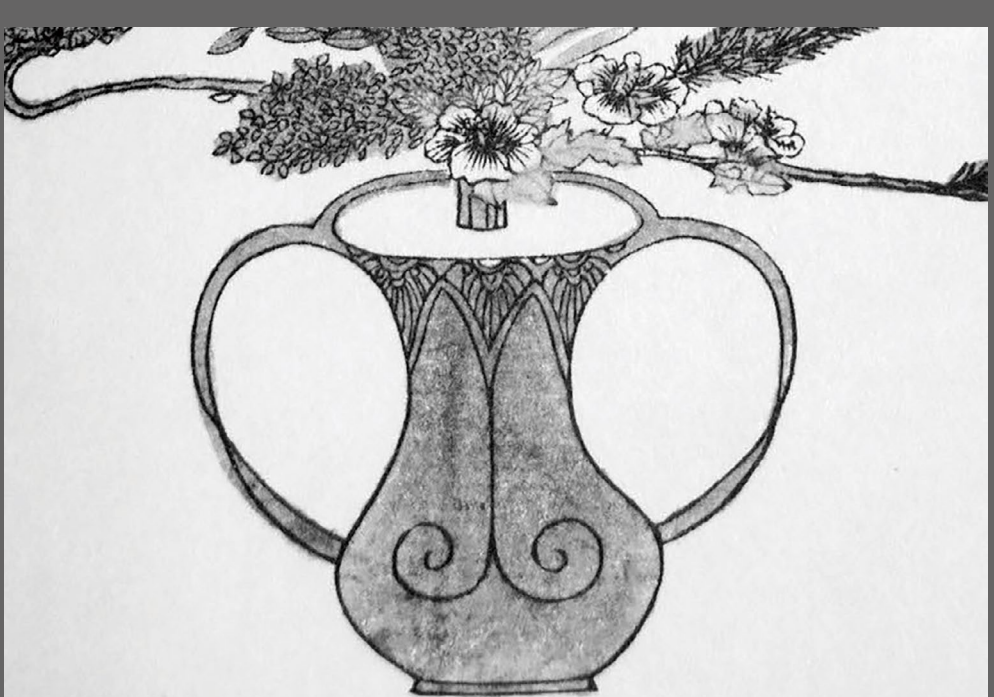
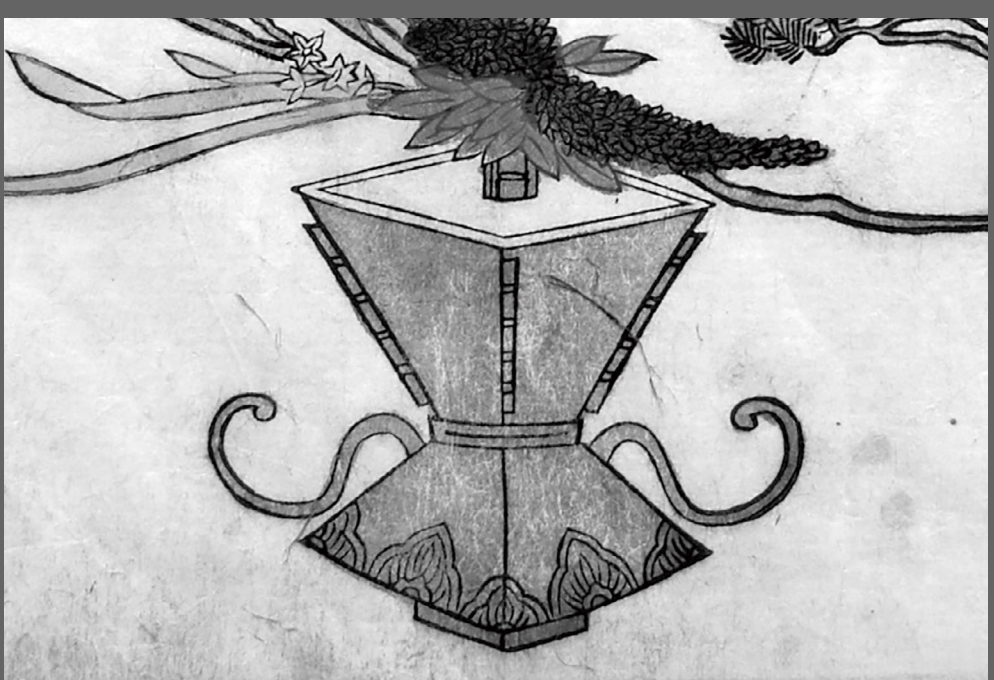
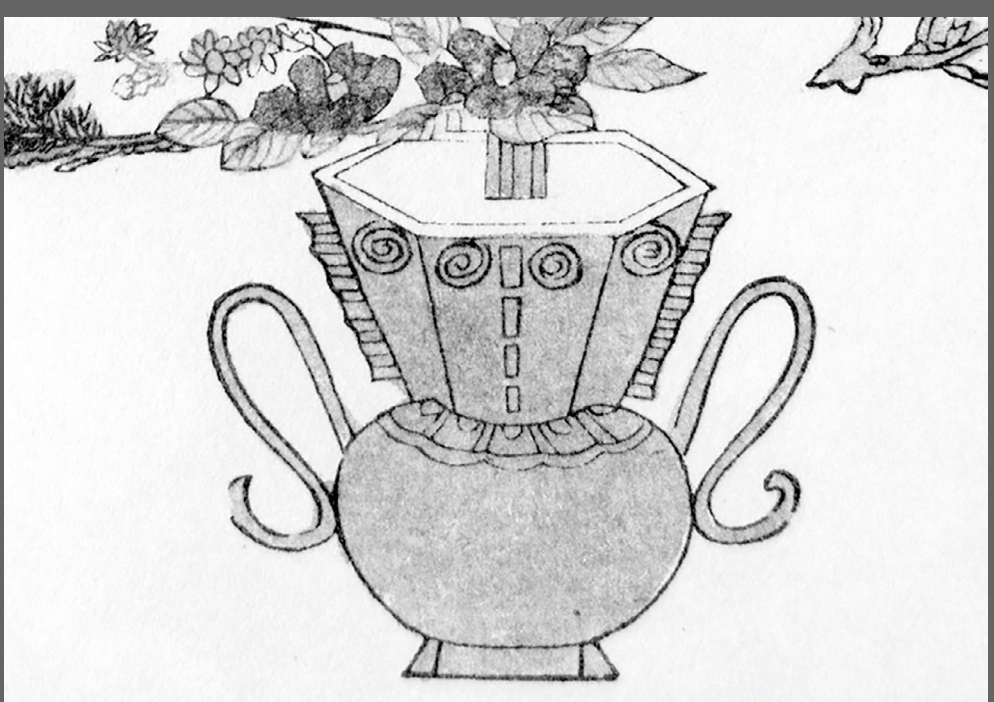
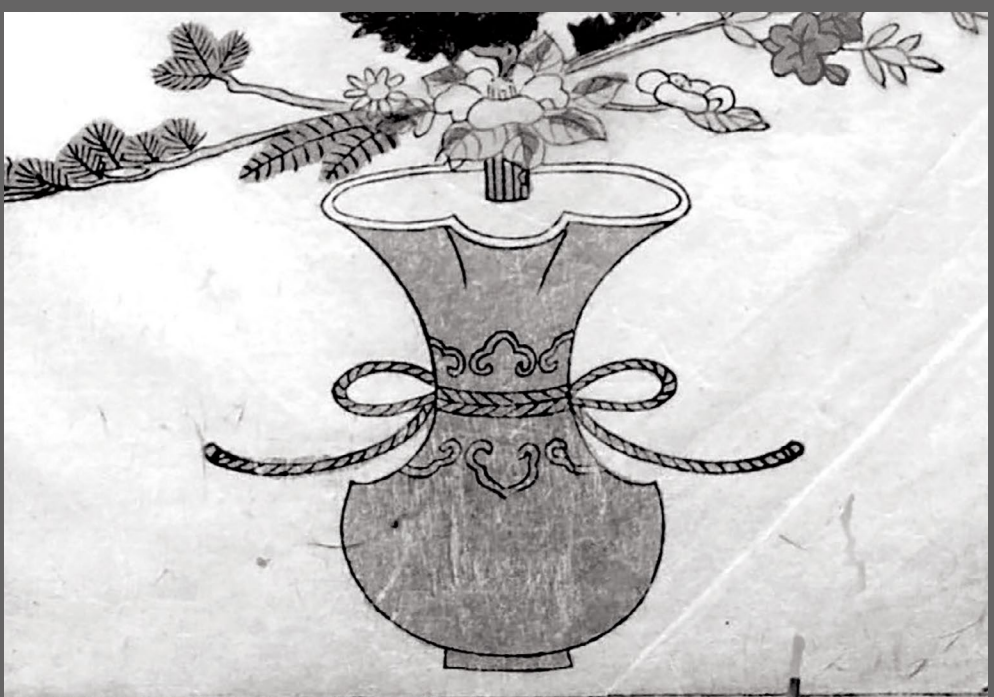
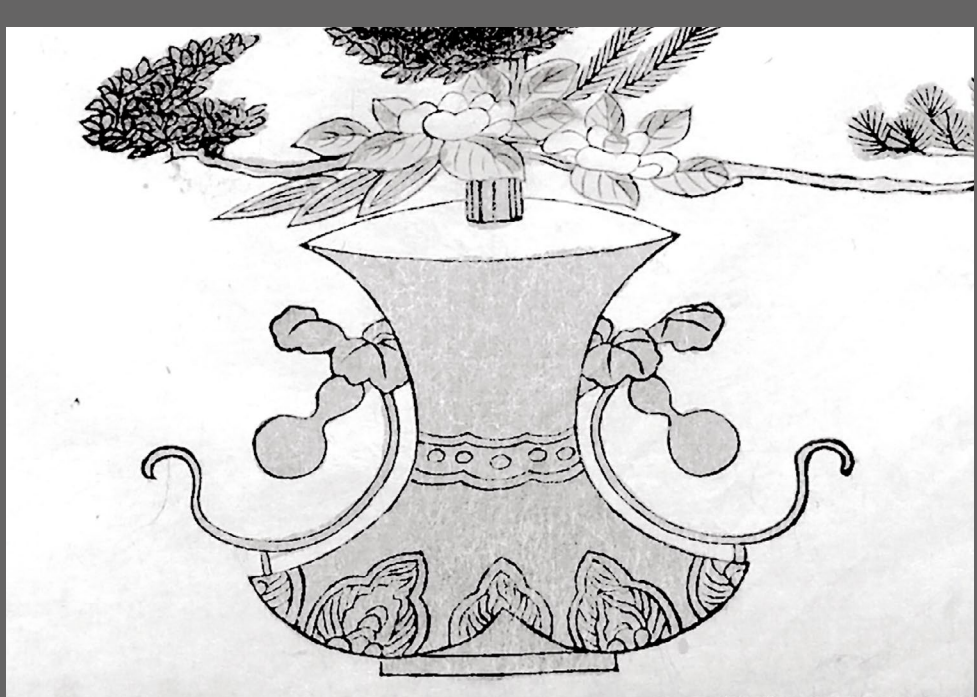
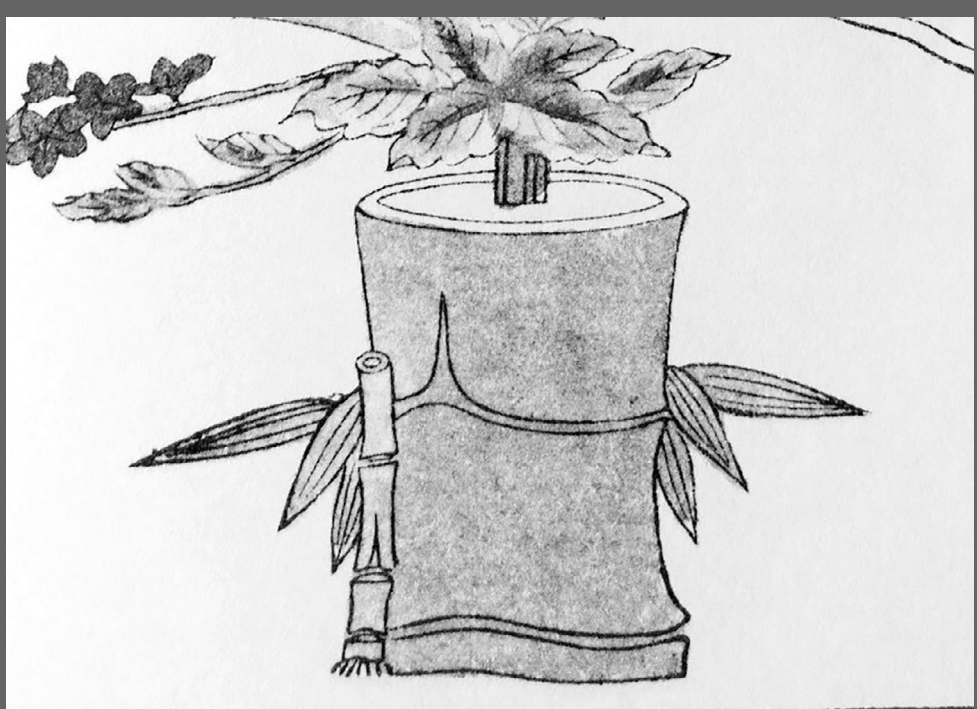
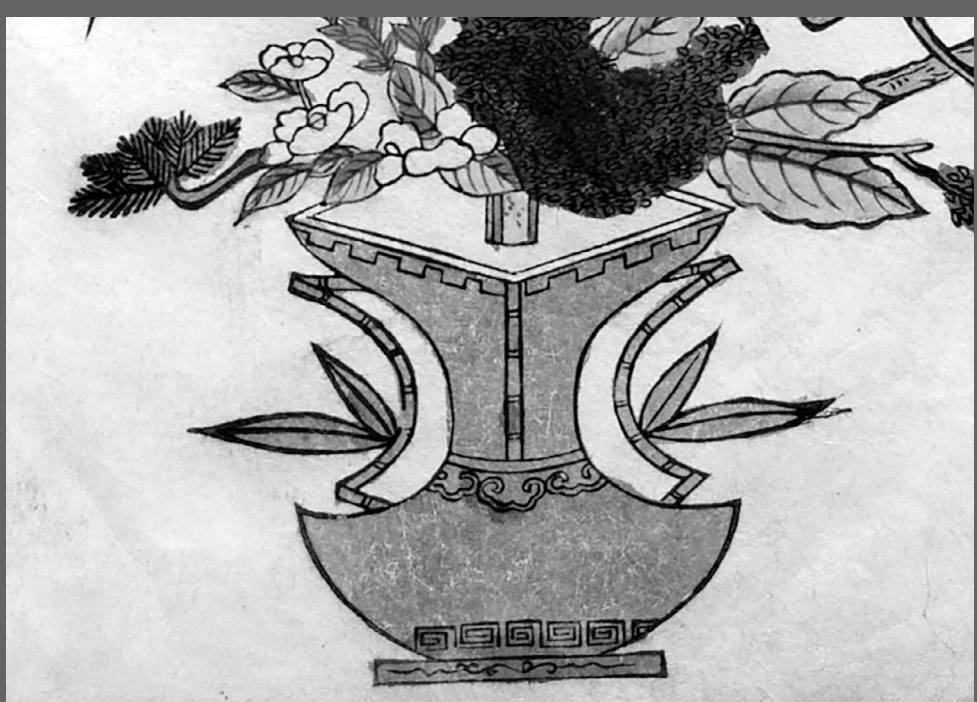
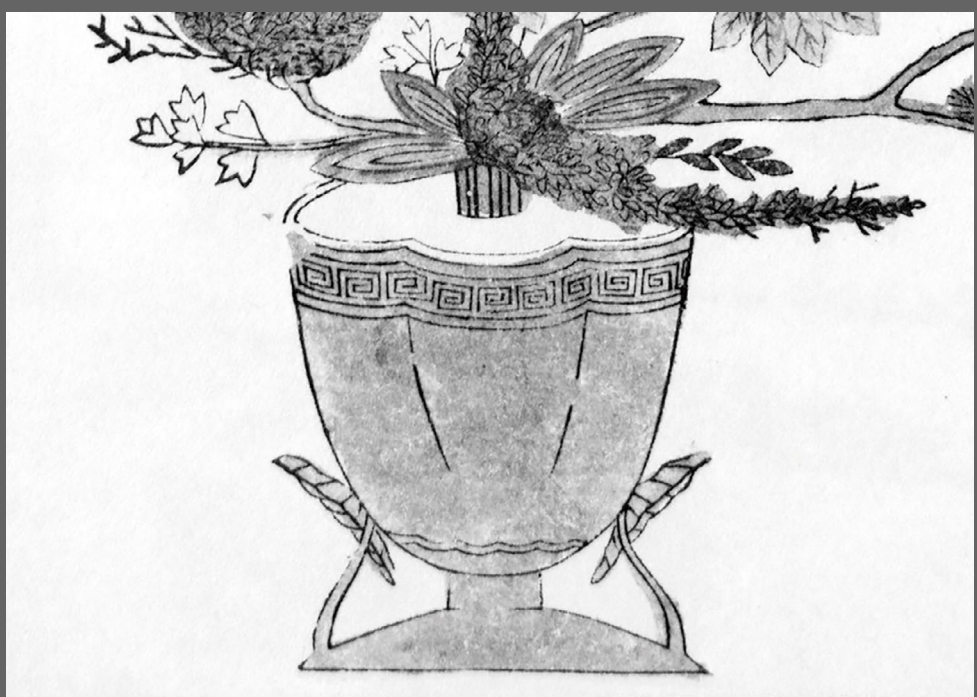
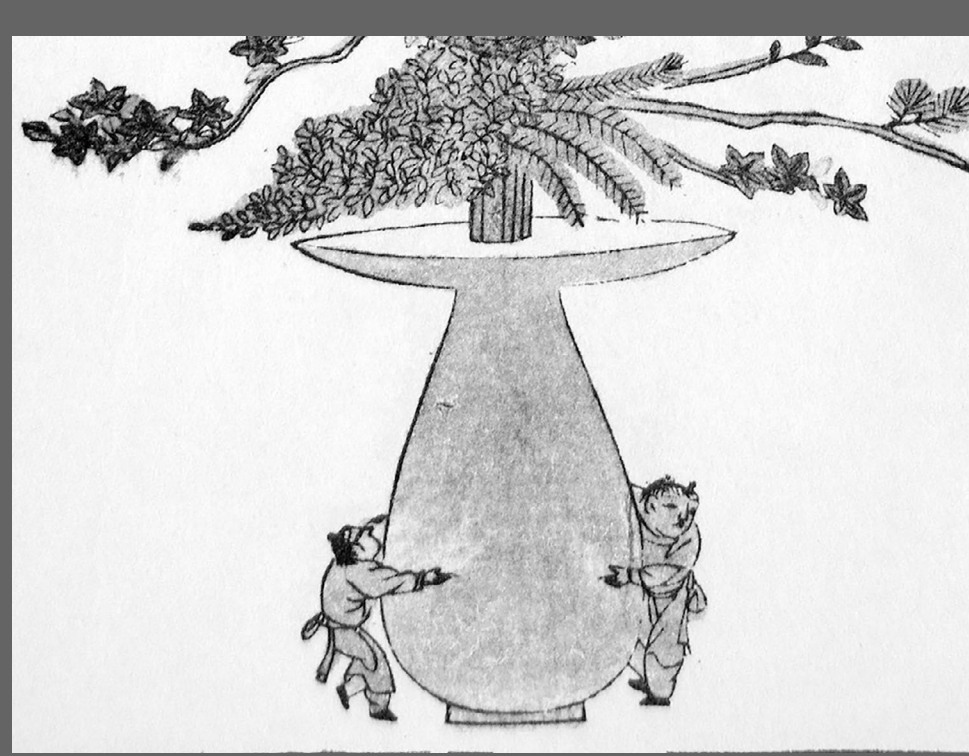
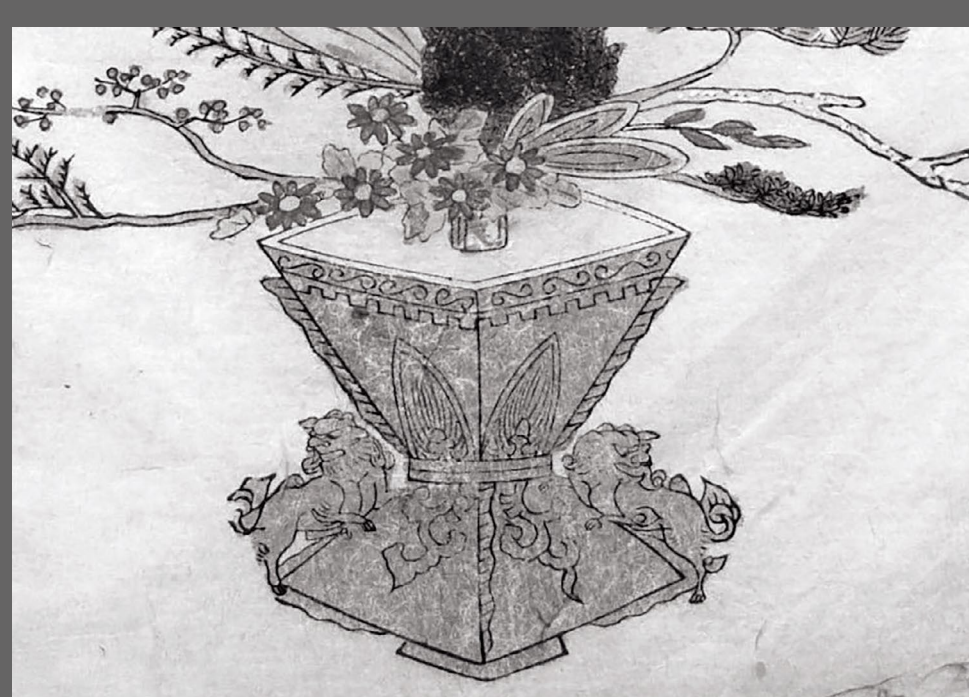
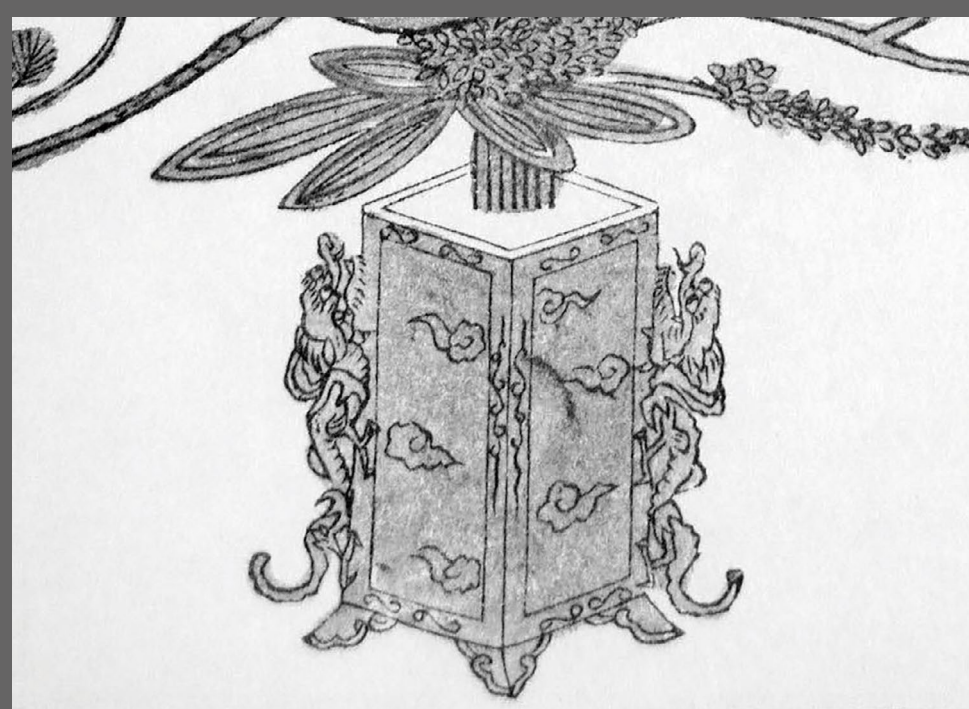
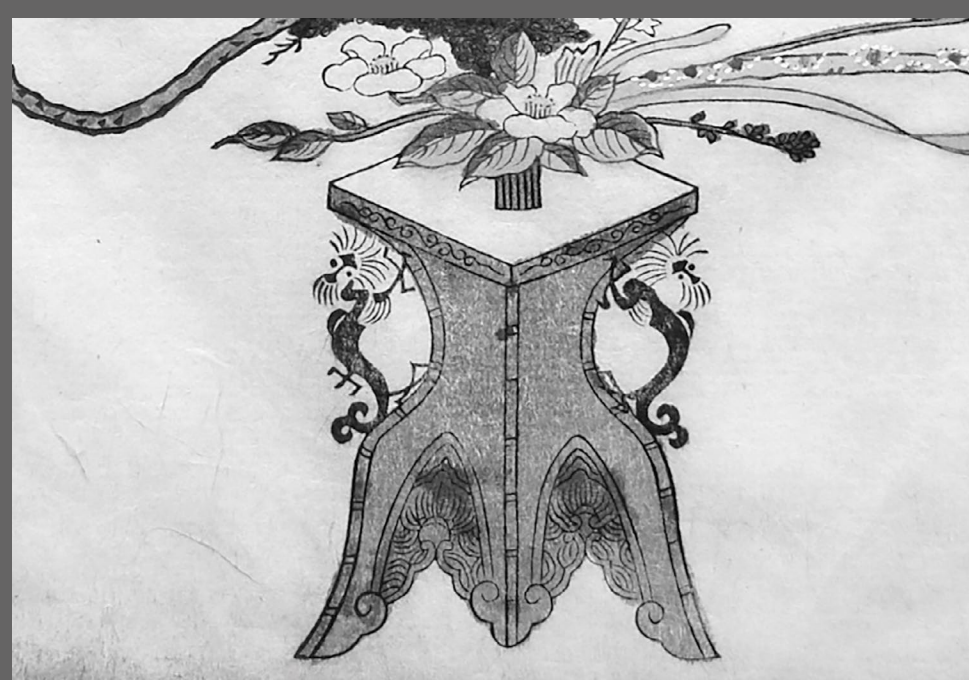
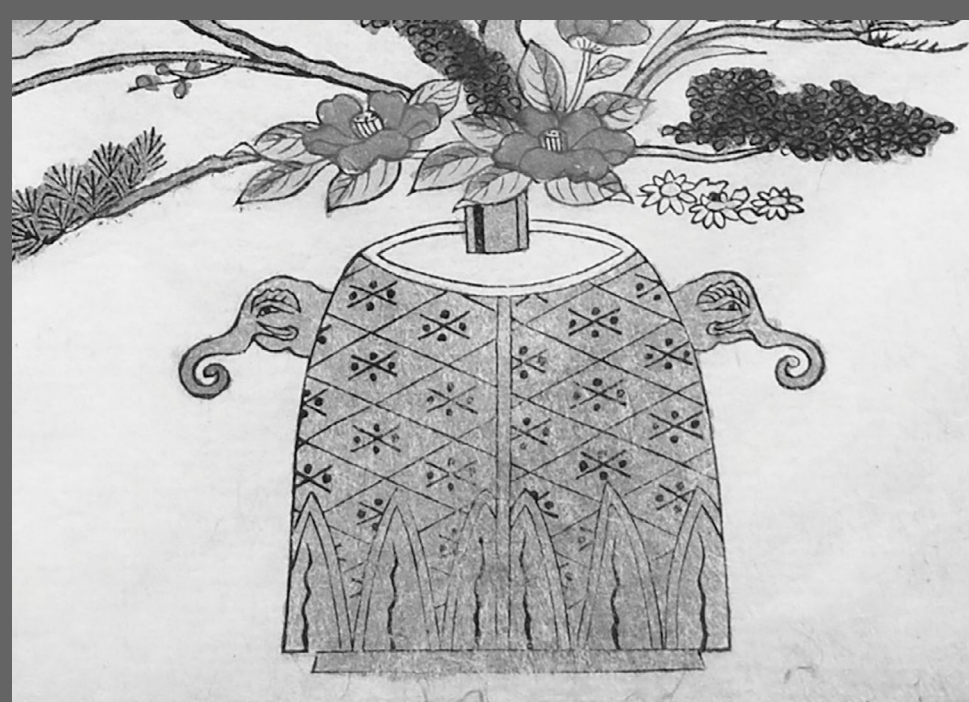
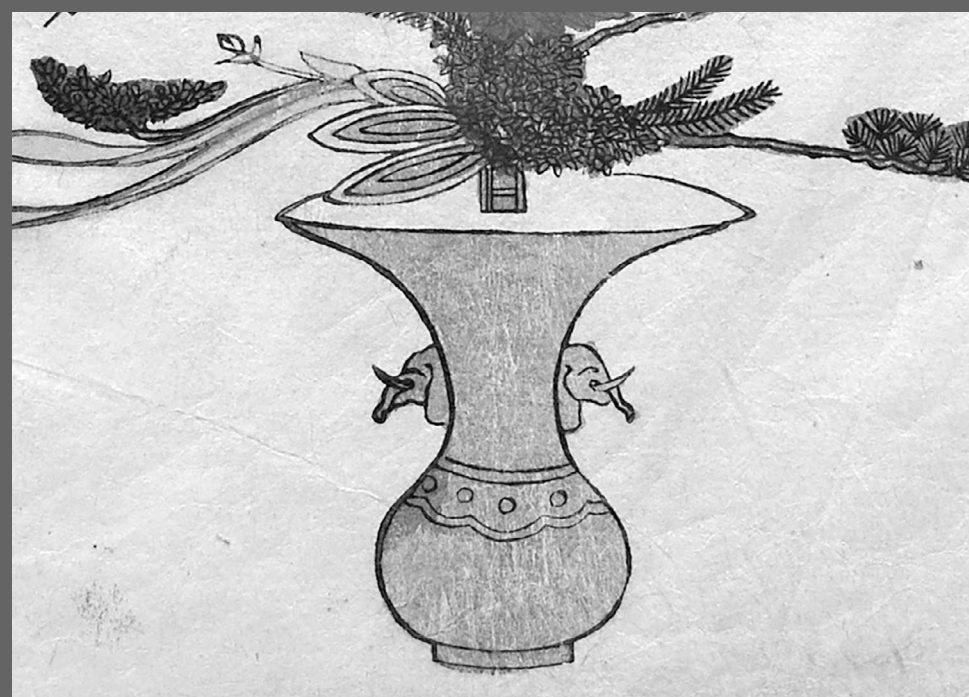
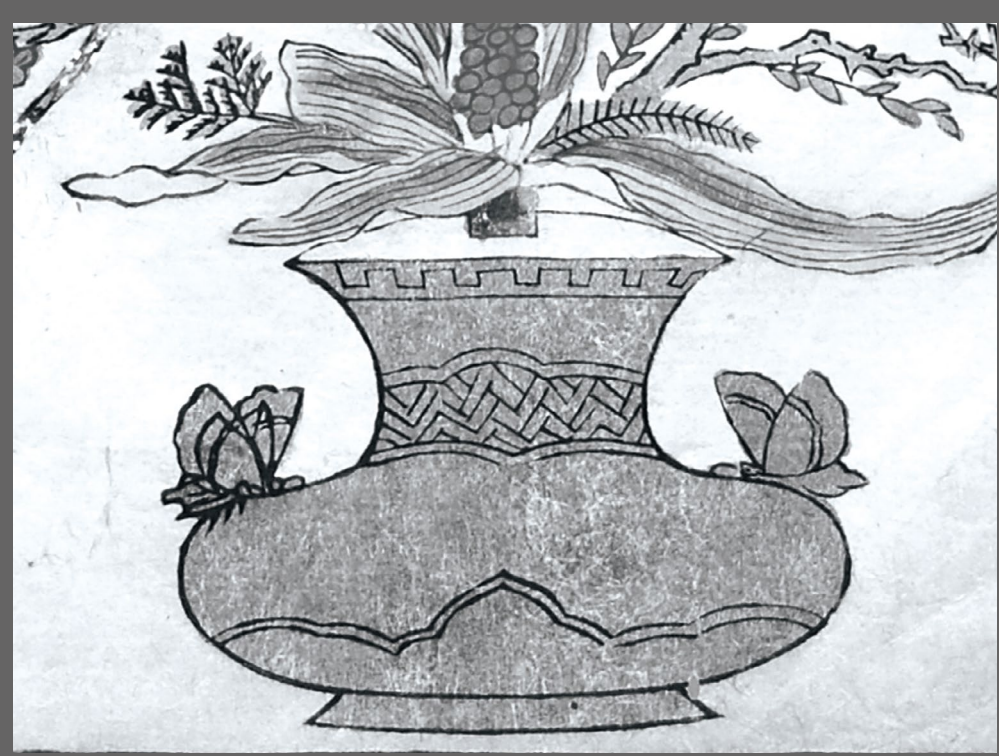
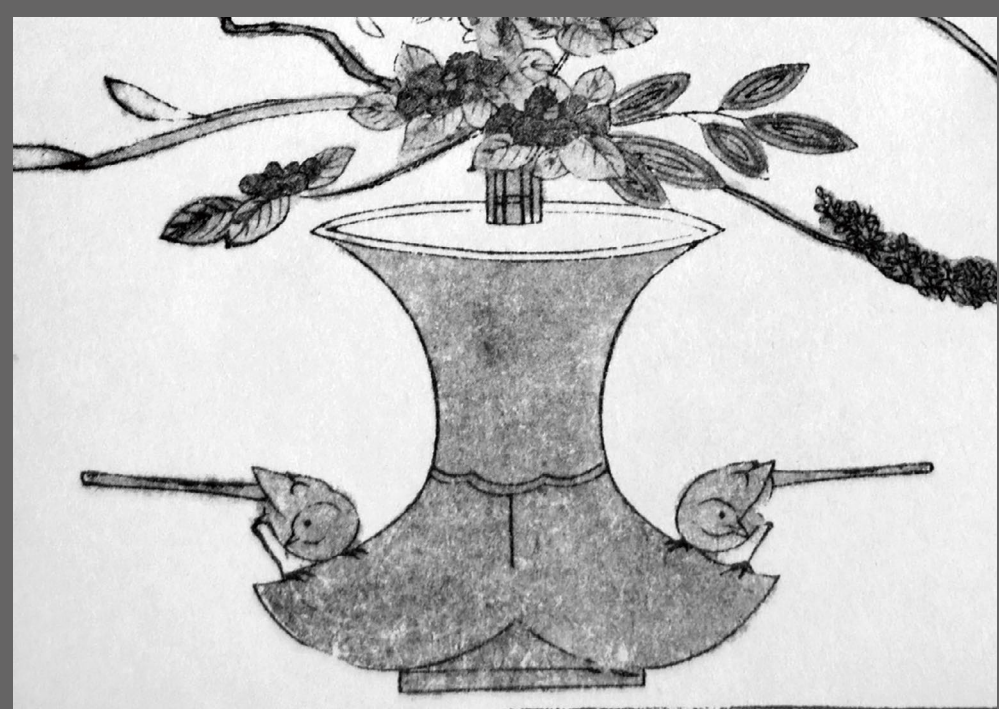
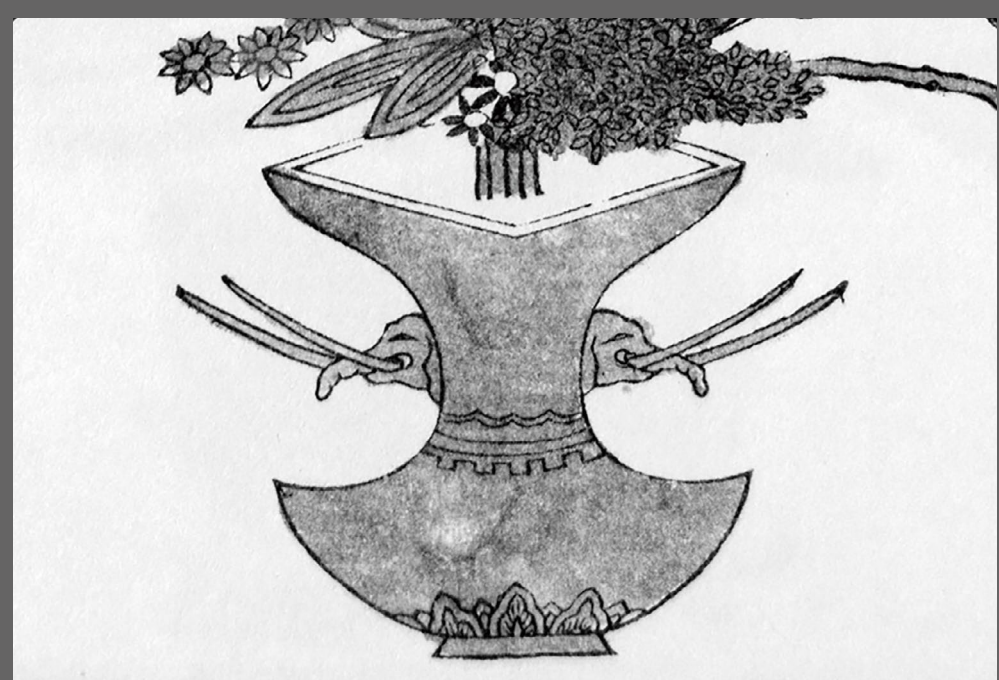
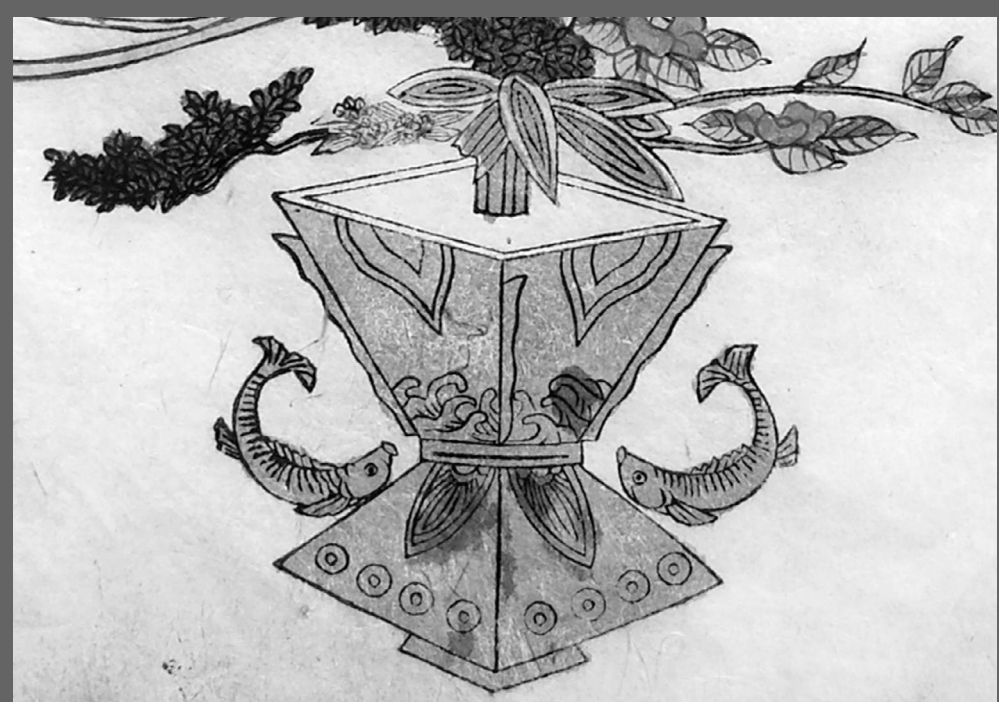
立花名目 訓解

- 心の事
- 正心の事
- 副の事
- 請の事
- 見越の事
- 流枝の事
- 前置の事
- 胴作りの事
- 控枝の事
- 立花腰の事
- 水きわの事
- かこいの事
- 谷洞の事
- つや あしらいの事
- 意気の事 うつりの事
- 張弛の事
- 立花色の事
- 貫枝の事

※花の芸術HPでもご覧いただけます。（但しルビはありません）

立花時勢粧の器

「立花時勢粧」には118の絵図が収められているが、その器は96種類もある。出版された元禄元年頃には、華やかな世相と立花の流行とが相まって、立花瓶にも様々な形や新しい意匠をこらしたものが作られた。自由奔放な自然の息吹とその調和を表現しようとした富春軒仙溪。特に行や草の立花には、それに呼応するような変化に富んだ器を選んで使っている。象、龍、獅子、唐子、蠟螂、魚、鳥、兎、蝶、瓢箪、藤の花、蓮の巻葉、竹などが意匠化されている。宝袋を模った器はめでたい席に立てるためのものだろうか。



春

春の絵図には躑躅、藤、桃、山吹、牡丹などとともに、杜若（春・秋）、芍薬（春・夏）、小菊（四季）、黄梅（晩冬・春）などは季節をまたいで使われている。
桜は他の花を交ぜず一色物で登場する。一種類の花材で立てる立花は一色物と呼ばれる。

藤の心（第92図）

一步子（富春軒…初版）
藤 松 檜 躑躅 柘植 小菊 鳶尾 若葉

S字に上へ伸びる藤蔓を真にした立花。「秘曲の図」の一つで、元は富春軒の作である。若々しい蔓の姿に藤の命を感じる。2色の躑躅で明るく彩りを増している。



一步子

夏

夏の立花には百合が多く登場する。蒲、^{あし}芦、^{ふと}太蘭、^{かんぞう}萱草、^{せんのおう}仙翁、^{ひおうぎ}檜扇、^{あおい}葵、^{しやくやく}芍薬などが季節を伝えてくれている。水生植物の蓮も特別な花材で一色で立てている。



草花砂の物 ^そ草 (第118図)

中野氏（富春軒仙溪：初版） 檜扇 芦 杜若 仙翁花 百合 擬宝珠 小菊 桔梗

この絵図の主役は草花で、植物の澆刺とした生命力を表現しようとした富春軒仙溪の心が読みとれる一作である。

秋

同

秋はなんといっても菊が多い。松、梅擬、南天、鶏頭、薄、杜若（四季咲き種）などと合わせて菊が彩りを添えている。一方、紅葉した楓は他の色のあるものを交ぜずに一色で立てている。楓の紅葉を特に大切に思う心の表れである。



富春軒

除真の内草の花形 (第30図)

富春軒
梅擬 柏 菊 小菊 椿 熊笹 伊吹 若葉 檉

自由に伸びる梅擬に菊が呼応する。水際に椿を加えた晩秋の一作。この「除真の内草の花形」こそ「草木自然の形をそのままに、（中略）工夫をなし、心をくだきて、自得の妙手より指し出したる形」であって「立花の骨髓」であると富春軒は言っている。

冬

冬には松、竹、梅、水仙、枝垂れ柳、南天、椿、沢水木、千両、などが使われている。中でも水仙は多く使われていて、水仙一色の絵を見ると今にも踊り出しそうな躍動感あふれる姿をしている。これは葉に針金を通して形作ったのではなく、実際にそのような水仙を見つけて立てたものである。水仙郷を訪れると曲がりくねった葉を見かける。富春軒はそんな自然の造形に水仙らしさを見いだしていた。

松の前置まえおき (第89図)

富春軒
檜 晒木 沢水木 水仙 松 苔 枇杷 櫻

水際の松と中央の晒木がつくる深山幽谷の景色。水仙は仙人のようである。檜の曲線と沢水木の直線が絶妙。苔生した小枝が効いている。



富春軒

直と曲の美

立花時勢粧の絵図には独特の美しさがある。特に富春軒が立てた立花や砂の物の絵は見ていて見飽きることがない。絵は平面だが表現されているのは生き生きとした立体だ。真っ直ぐ伸びる枝。ねじ曲がった枝。それらが前後左右に伸び、重なることで生まれる美は、他に真似のできない独自の境地である。使われている枝はおそらく何日も山に分け入って探し求めたものだろう。風雪に耐えて曲がりくねった植物の神々しさを、立花の様式で美しく昇華させたかったのだろう。

また、絵図は絵としても優れている。おそらく富春軒自身が思いを込めて描いたものだろう。木版刷りに手彩色したものの中には、富春軒みずから、もしくは絵師に指示をして色をつけさせたものもあるに違いない。

同



富春軒

松除真立花 (第21図)

除心の内草の花形

富春軒

松 梅 晒木 苔木 水仙 椿 柘植 伊吹

枇杷 若葉

自然の息吹を見つめる眼差し

草花



僧光清

草花立 (第95図)

僧光清 (富春軒・初版)
芦 薄 百合 芍薬 杜若 小菊 熊笹
紫苑 著

「立花時勢粧下 (巻3) 秘曲の図」に納められた「草花立」の立花図で、今回『夏』の
パネルで紹介した「草花砂の物草」の絵図と対をなす草花主体の立花である。葉を広げ
茎を伸ばし花を咲かせる草花たち。自然の息吹を見つめる眼差しを感じる。
花をいけるのは、和歌や俳句や詩に自然の輝きを詠みこむのに似ている。肝心なのは輝
きを感じる心だ。富春軒のいける花はどの花もキラキラ輝いている。
「いけばなは花と協力しながら生き生きとした美をつくりだす芸術」なのだ。

一色物いっしきもの

立花時勢粧には「秘曲の図」の中に7種の一色立花（桜・杜若・蓮・菊・水仙・紅葉・松）がそれぞれ3作ずつ描かれていて、そのほとんどを富春軒（仙溪）自ら立てている。
一色物は一種類の植物による景観を表現するもので、役枝のほとんどを一種で立てる。

桜一色立花

（第116図）

（富春軒：初版）

桜 苔木 伊吹 檉かし 柘植つげ 小羊齒



同砂之物

桜一色砂の物

（第117図）

（富春軒：初版）

桜 苔木 伊吹 柘植つげ 万年青ばんねい 檉かし 羊齒



一色物

立花時勢粧には「秘曲の図」の中に7種の「一色立花」(桜・杜若・蓮・菊・水仙・紅葉・松)がそれぞれ3作ずつ描かれていて、そのほとんどを富春軒(仙溪)自ら立てている。
一色物は一種類の植物による景観を表現するもので、役枝のほとんどを一種で立てる。

杜若一色 (第98図)

桑原次郎兵衛
杜若 河骨 著栽



桑原次郎兵衛

同

蓮一色 (第101図)

富春軒
芦 蓮 小菊



富春軒

同

菊一色 (第104図)

富春軒
菊 小菊



富春軒

同

水仙一色 (第106図)

富春軒
水仙 金盞花 著栽



富春軒

水仙一色

一色物いっしきもの

立花時勢粧には「秘曲の図」の中に7種の「一色立花（桜・杜若・蓮・菊・水仙・紅葉・松）」がそれぞれ3作ずつ描かれていて、そのほとんどを富春軒（仙溪）自ら立てている。
一色物は一種類の植物による景観を表現するもので、役枝のほとんどを一種で立てる。

紅葉一色（第112図）

（富春軒：初版）
楓 晒木



松一色砂の物（第111図）

（富春軒：初版）
松 晒木 苔木



立花を立てた人達

立花時勢粧の絵図には50人の名前が載る（初版では42人）。人物名と作品数は次のようになってい

る。（登場順。（ ）内は初版での数。）

桑原正栄 4（3）
富春軒仙溪 17（35）
桑原次郎兵衛 15（17）

中野五郎左衛門 2
中野小左衛門 2
中野宗左衛門 2
西村松庵 7（6）
谷久兵衛 3（2）
寺田清左衛門 4
寺田八郎兵衛 4
筑摩九郎右衛門 2

林昌 1
桑原半兵衛 2
菱屋六兵衛 2
松本氏 1
竹葉軒治兵衛 2
相田湛流 1
坂田任性 1
中塚半之丞 1
専定寺 2（1）
東湖軒 1（0）
高橋吉兵衛 2
濱崎九左衛門 1
三好理兵衛 1
知休 1
中川常意 2
桔梗屋平右衛門 1
大坂屋五郎左衛門 1
山本四郎左衛門 1
恭圓 1
大橋源七 1
西川和泉 1
松尾清左衛門 1
澤重左衛門 1
小川源右衛門 1
十二屋善兵衛 1
圓音 1
服部三郎右門 1
富田屋甚左衛門 1
丸屋勘助 1
弁秀 1
寺内長三郎 1
寺田清兵衛 1
釋善子 1（0）
一步子 1（0）
僧光清 1（0）
寸松軒 1（0）
義憤 1（0）
桑原治郎兵衛 1（0）
中野氏 1（0）

立花時勢粧 上中下

春夏秋冬

巻1から巻3の3冊「立花時勢粧 上中下」には118作の立花図と花形の説明が載る。

絵図の花材をたよりに季節毎に分けてみると次のようになる。（およその数）

春 25
夏 24
秋 30
冬 39

季節を通して立花が立てられていたことが想像できる。

立花秘傳抄 一〜五

巻4から巻8の5冊「立花秘傳抄 一〜五」には草木の出生、立花の技法と道具、作意や技巧について詳しく書かれている。

立花秘傳抄の中で個人的に一番好きなところを次に紹介する。

立花色の事

師に問う。
立花色と云うはいかなる所を云うや。
師の云わく、これ花道の奥義、出生玄妙体を瓶にうつすを仮に名付けて色と云う。

その玄妙体とはいかなる所を云うや。
師の云わく、柳は緑、花は紅。
問うて云わく、いかがして指し得べきや。

師語りて云わく、草木我が心にまかする時は工に貪著するゆえ、必ず出生の景气得がたし。

また我が心草木にまかせて念慮なく、植に生ずるは植に、横に生ずるは横に遣う時は、草木自然の体、顕なるべし。

橐駝曰、古文

以能順木之天以致其性焉爾

以て能く木の天に順ひ
以て其の性を致すのみ

この語花道の奥義によく相叶えり。誠に微細の教導、向上の一路なり。この境をよくよく工夫して修練止まざるときは、覚えずして色あるべし。

種樹郭橐駝傳

柳宗元（773〜819）

中国唐代の文人、柳宗元が書いた「橐駝」の話。富春軒は知っていて、「立花色の事」の中に引用している。その「種樹郭橐駝傳」とは次のような話である。

橐駝は腕のいい植木屋で、彼が植えた木はよく成長し、果樹は多くの実を实らせる。
あるとき役人が評判を聞きつけ、橐駝にそのコツを尋ねるのだが、橐駝は答えて言う。

「私にそのような力があるのではない。木の天然自然に従ってその生まれ持った生きる働きを導くことができるだけだ。

植える時は子を育てる時のように大事にし、手放すときは棄てるようにすればその木の天性は損なわれず完全で、生きる働きが適切に行われるのである。」

富春軒仙溪はこの「橐駝」の考え方に共感し、花を挿す極意として花伝書に加えておいてくれた。

富春軒から渡された「橐駝の教え」が、多くの人に届くことを願う。

種樹郭橐駝傳のことを

「花の芸術」サイトで

紹介しています。

